

水環境館いきものトピック vol.7

「生態系」と「生物多様性」

みなさんは「生態系」や「生物多様性」という言葉を聞いたことがありますか？ 私たちは様々な生き物を利用して暮らしています。様々な環境問題が叫ばれる今だからこそ、みなさんにもぜひ関心を持っていただきたいと思います。

はじめに

「生態系」とは・・・その環境を作り上げている、空気、石、砂、水、生き物すべてをひっくるめたもの。
(地球もひとつの生態系。ただ、それだと広すぎるので、「紫川上流の生態系」や「福智山の生態系」と言うように、区切って考える。)

「生物多様性」とは・・・ひとつの生態系の中にどれだけ命を育む多様性があるか？というもの

それぞれを一言で説明するなら上ようになります。「生態系」は分かりやすいかもしれませんが、「生物多様性」はちょっと複雑そうです。今回は、そんな生物多様性をなるべく難しい言葉を使わずに説明していきます。

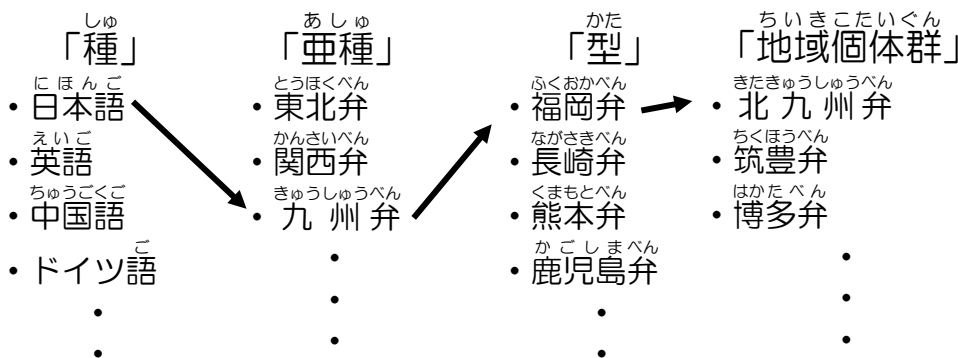
生物多様性にはいろいろな考え方がありますが、代表的なのは、①種の多様性 ②生態系の多様性 ③遺伝的多様性の3つです。

①種の多様性は、ひとつの生態系の中にどれだけたくさんの種類の生き物がいるか？というものです。種類が多いほど豊かな多様性と言えますが、たとえば、もともといなかった外来生物が増えたとしても、多様性が豊かになったとは言いません。すなわち種の多様性とは「もともとその生態系にいるすべての生き物」の種類数を指す言葉です。

②生態系の多様性は、砂漠、山林、海、川、サンゴ礁などの生態系の多様性を言います。たとえば、地球全体が砂漠だけになれば、生態系の多様性が豊かではないと言うことです。紫川にも、流れの早い場所、緩やかな場所、水が冷たい場所、暖かい場所、砂が溜まっている場所、泥が溜まっている場所、というようにさまざまな生態系があります。

③遺伝的多様性の「遺伝」とは、一言で言うと「血筋(家系)」です。ひとつの種の中にも、より多くの血筋がある方が、多様性が豊かと言えます。ここでは世界中に溢れている言語を生き物として考えてみましょう。

もしも「言語」が「生き物」だったら・・・



ひとつの種の中にもたくさんの「小さな違い」がある。これが多いほど遺伝的な多様性が豊かだと言える。

あくまで例えであり、厳密には少し違うところもありますが、大まかな考え方としては上ようになります。確かに方言は地域によって違いがありますが、全体としては日本語という一つの種に含められます。種の中に含まれる地域ごとの違いは、「生き物をどう守るか？」というテーマでも必要になってきます。あくまで例えばですが、北九州弁が少ないからといって、「同じ日本語だから」と他の方言を移入すると北九州弁は消滅し、多様性は失われます。これからは私たちが自然の恵み「生態系サービス」を受けられるよう、みなさんも豊かな生態系を残していきましょう。

